

英国の新聞・雑誌に見られる *Help* + Bare Infinitive¹⁾

——コンピュータによる調査——

豊 田 暁

1. はじめに

動詞helpの後に不定詞が続く場合、to不定詞をとることもあれば、原形不定詞をとることもある。

- (a) He helped (her) (to) carry the typewriter.
- (b) He insisted on helping (her) (to) carry the typewriter.
- (c) He offered to help (her) (to) carry the typewriter.

(a) は、主語の後に述語動詞helpが続き、その後にto不定詞あるいは原形不定詞がくる例である。helpの直後に目的語をとることもあれば、とらないこともある。(b) は動名詞で、helpが-ing形をとる例であり、(c) はhelp自体がto不定詞になっている例である。

これまで一般に、動詞helpの後では、イギリス英語ではto不定詞をとり、アメリカ英語では原形不定詞をとると言われてきたが、最近では英国の雑誌や新聞の記事などのフォーマルな英語にも原形不定詞をとる例がかなり見受けられる。そこで、ここではコンピュータを利用して、上記3つの構文をとる実例を、英国の雑誌および新聞記事のCD-ROM版データベースからできるだけ多く引き出し、最近のto省略の実態を定量的に確認する。調査に使用した資料は次の2種類である。

- (1) *The Economist on CD-ROM* (1996)
- (2) *The Daily and Sunday Telegraph on CD-ROM* (1996)

*Economist*はビジネス・経済の専門誌であり、*Telegraph*は英国を代表する保守系の高級紙と言われている。文の長さ、語彙、その他の文体上の特徴、読者層などを考え合わせると、両資料で使用されている英語はフォーマルな書きことばとさえよう。なお、新聞・雑誌の英語の語法と、その他の一般のイギリス英語の語法を比較するために、英国のHelicon社が発行しているCD-ROM版百科事典*The Hutchinson Multimedia Encyclopedia* (1998) の記事を利用して、同様の調査を行うこととした。

2. 先行研究

動詞helpの後の不定詞の形については古くから取り上げられている問題でもあり、多くの参考書で解

説されているが、ここでは手元の比較的新しい文法書、語法書、辞書の語法欄の記述内容を、改めて分類・整理しておくことにする。

- (1) イギリス英語ではtoをつけ、アメリカ英語ではtoを省略することが多い。

R. W. Burchfield, *The New Fowler's Modern English Usage* (s.v. help) / Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (p.1206)

CODは、第5版(1964)までtoをつけた例文を載せていたが、第6版(1976)でtoの使用を任意としている。LDCE(1978)は、toのつかない例文にesp.AmEのラベルを貼っていたが、第2版(1987)でそのラベルを外している。OALDの第3版(1974)では、"The omission of to is more usual in US than in GB usage."と説明していたが、第4版(1989)でこの記述を削除している。

松田裕『米語のインパクト』(p.186)は、1975年から78年までに発行された*The Times*, *The Times Educational Supplement*, *Observer*, *The Listener*の4種類の英国の新聞・雑誌から、ある期間に収集した<S help (O) (to) do>型の事例合計94例を分類して、「新聞雑誌に関する限り、イギリス英語ではtoを付すのが普通」と結論している。ちなみに同調査の個々のデータを集計すると、全体でto不定詞をとる例が66例(70.2%)、原形不定詞をとる例が28例(29.8%)になる。

- (2) フォーマルな英語ではtoをつけ、インフォーマルな英語ではtoを省略する。あるいは、書きことばではtoをつけることが多い。

L. G. Alexander, *Longman English Grammar* (p.301) / Sidney Greenbaum and Janet Whitcut, *Longman Guide to English Usage* (s.v. help) / Michael Swan, *Practical English Usage*² (s.v. help) / Loreto Todd, *Cassell Dictionary of English Usage* (s.v. help)

- (3) 援助者が仕事の一部を直接担う場合や、被援助者と共同して行動する場合は、toの省略が可能。あるいは、物主語の場合は普通toを省略しない。

Frederick T. Wood, *Current English Usage* (s.v. HELP) / 『ジーニアス英和辞典²』(helpの項) / 『小学館プログレッシブ英和中辞典³』(helpの項)

ただし、Woodの改訂版(1995)では、これに関する記述を削除している。

- (4) helpの後に直接目的語をとらない場合は、toをつけることを好む人もいる。

Martin H. Manser, *Bloomsbury Good Word Guide*² (s.v. help)

- (5) help自体がto不定詞になっている場合、その後ではto不定詞を避ける傾向がある。

R. W. Burchfield, *The New Fowler's Modern English Usage* (s.v. help)

松田裕『米語のインパクト』(p.187)は、to helpの後の不定詞の形について行った話しことばの実態調査で、「英米ともto helpの後のtoの重複を忌避する傾向がある」と述べている。しかし、1979年に行った英米の新聞・雑誌記事の調査結果として、「米雑誌ではすべての用例が裸不定詞であったのに対し、英新聞雑誌ではtoつき不定詞を堂々としきりに使用している」と報告している。ちなみに同調査の数値を総合すると、英国の新聞・雑誌では37例中21例(56.8%)がto不定詞、16例(43.2%)が原形不定詞になる。

(6) (意味に変わりなく) toはつけてもつけなくてもよい。

Sylvia Chalker, *English Grammar Word by Word* (s.v. help: verb) / John Eastwood, *Oxford Guide to English Grammar* (pp.149, 152) / Geoffrey Leech and Jan Svartvik, *A Communicative Grammar of English* (p.393) / F. R. Palmer, *The English Verb*² (p.195) / A. J. Thomson and A. V. Martinet, *A Practical English Grammar* (p.220) / Frederick T. Wood, R. H. Flavell and L. M. Flavell, *The Macmillan Dictionary of Current English Usage* (s.v. help) / Collins COBUILD *English Usage* (s.v. help)

以上の参考書の記述を踏まえて、以下、英国の新聞および雑誌の英語について、一般の英語と比較しながら、最近のtoの省略実態を観察する。

3. 調査結果と考察

A. S help (O) (to) do

調査結果を紹介する前に、収集した事例の分類方法について、簡単に述べておくことにする。事例の分類にあたっては、動詞helpが用いられている構文やhelp自体の変化形を考慮に入れるようにした。構文について言えば、例えば先に引用したように、Burchfieldは、help自体がto不定詞になっている場合は、その後にくる不定詞はtoを避ける傾向にある、と指摘している。したがって、そのような構文におけるhelpの実例は、<S help (O) (to) do>型の構文に現れるhelpの実例とは一応区別して、分類・集計するほうが妥当と思われる。また、helpにはhelps, helped, helpingの変化形がある。このうち、実際の資料では、比較的使用頻度の高いものと、低いものがあると推測される。実際、*Economist*で、helpとそのすべての変化形が一度に検索できるTRUNCATIONを利用して試してみると、helpとhelpedの使用頻度が圧倒的に高く、helpsやhelpingの頻度は非常に低いことがわかる。したがって、有効事例を機械的に収集すれば、サンプルは、helpとhelpedの2つの形が大多数を占めることになる。使用頻度の高い形を収集・分類して語法を説明することも一つの方法ではある。しかし、変化形によるその後の不定詞の形への影響を考慮すると、使用頻度の高いhelpとhelpedの2つだけを主に調査対象とするよりは、helpsやhelpingも同じ条件で調査対象に加え、それぞれの傾向を確認した上でhelpの語法について考察するほうが、より一般的かつ客観的な結論を得ることが可能になると思われる。そこで、ここでは、helpの4つの形について、別々に分類・集計を行うこととした。

以上の方法に従い、まず、最も一般的な<S help (O) (to) do>の構文から見ることにする。*Hutchinson, Economist, Telegraph*の3種類の資料からhelpとその変化形について、この構文と一致する有効事例をそれぞれ50例まで順に検索し、資料別にto不定詞と原形不定詞に分類・集計すると、その結果は次の表1になる。

表1 S help (O) (to) do

変化形	HUTCHINSON		ECONOMIST		TELEGRAPH	
	to不定詞	原形	to不定詞	原形	to不定詞	原形
help	38	12	20	30	20	30
helps	32	15	33	17	26	24
helped	32	18	21	29	19	31
helping	3	0	43	4	39	11
合計	105 (70.0%)	45 (30.0%)	117 (59.4%)	80 (40.6%)	104 (52.0%)	96 (48.0%)

表が示すように、*Hutchinson*では、合計でto不定詞が70パーセント、原形不定詞が30パーセントを占め、to不定詞が原形不定詞を大きく上回っている。フォーマルな一般のイギリス英語では、依然としてto不定詞が好まれていると言えよう。一方、*Economist*では、to不定詞が59.4パーセント、原形不定詞が40.6パーセントで、ここでも原形不定詞が優勢ではあるが、その差は約20ポイントに縮小する。更に、*Telegraph*では、to不定詞が52パーセント、原形不定詞が48パーセントを占め、両者の使用頻度はほぼ等しくなる。換言すれば、<S help (O) (to) do>の構文では、新聞の英語でtoの省略率が最も高く、それに次いで雑誌の英語が続く。一般の英語はtoの省略率が最も低い。

この傾向は、helpの各変化形の数値を更に細かく分類して比較すると、なお一層明らかになる。*Hutchinson*では、helpの4つのすべての形でto不定詞が優勢であり、現在分詞helpingの3例はすべてto不定詞を伴う。一方、*Economist*と*Telegraph*では、helpsとhelpingでto不定詞が優勢であり、とりわけhelpingでto不定詞をとる実例数が両資料で非常に多く見られる。helpとhelpedでは、逆に原形不定詞が優勢である。*Hutchinson*、*Economist*、*Telegraph*の3種類のすべての資料に共通している点は、現在分詞のhelpingだけが、他の3つの形と比較して、to不定詞の割合が異常に高いということである。そこで、helpingを除外し、他の3つの形を合計して、to不定詞と原形不定詞の割合を比較すると、表に示すように、*Hutchinson*が、それぞれ69.4パーセントと30.6パーセント、*Economist*が49.3パーセントと50.7パーセント、そして*Telegraph*では43.3パーセントと56.7パーセントになる。*Hutchinson*では数値に大きな変化はなく、依然としてto不定詞が優勢であるが、*Economist*と*Telegraph*では原形不定詞の割合がto不定詞の割合を上回る。

以上の調査結果と約20年前に行われた松田 (p.186) の新聞・雑誌における調査結果を比較すれば、最近の新聞・雑誌における英語のto省略の増加傾向は明らかである。同調査によれば、原形不定詞の使用率は29.8パーセントであった。ところが、今回の新聞・雑誌における原形不定詞の合計の平均値を算出すると44.3パーセントになり、通常to不定詞をとることが多い現在分詞のhelpingを除けば、53.7パーセントになる。即ち、単純合計の比較でも14.5パーセント、また、現在分詞helpingを除けば、23.9パーセント原形不定詞の使用頻度が増加していることになる。

以上の調査結果から見る限り、英国の最近の新聞・雑誌の英語では、to不定詞と原形不定詞が区別なく用いられていると見て差し支えないであろう。「イギリス英語ではtoをつけることが多い」あるいは「フォーマルな英語にはtoをつける」とする文法書や語法書の記述は、一般の英語にはある程度当てはまるとしても、新聞・雑誌の英語には必ずしも当てはまらない。イギリス英語におけるtoの省略は、一般の英語よりも新聞・雑誌の英語の中でより着実に進行していると言えよう。以下、*Economist*と*Telegraph*から収集したto不定詞と原形不定詞の実例を挙げる。

[Economist]

- (1) In themselves, they say little about the sake's character, but they help jizake drinkers to identify particular flavours and fragrance... (Dec 21)
- (2) Mr Jayewardene helped to found the pro-western United National Party... (Nov 23)
- (3) Being a Cossack may also help you get a job. (Dec 21)
- (4) Stockmarket analysts help diagnose companies' problems. (Nov 23)

[Telegraph]

- (1) 'You are helping the visitors to experience a fantasy,' the friendly Artistic Director explained. (Dec 01)
- (2) Despite his religious vocation, Dossetti also helped to prepare Italy's republican constitution and... (Dec 28)
- (3) He helped me bring in the bags, and pointed out that one item had not been sent. (Dec 24)
- (4) She helped arrange for her to edit a special anniversary edition of the mass-market women's magazine Prima earlier this year. (Dec 26)

B. *helping* (O) (to) *do*

先の表1で見たように、<S *help* (O) (to) *do*>の構文で、*help*が現在分詞になる進行形の場合には、すべての資料でto不定詞をとる実例が圧倒的に多かったが、*help*が同じ-ing形で動名詞になる場合はどうであろうか。各資料で50例まで順に検索し、同様にto不定詞と原形不定詞に分類・集計すると、その結果は次の表2になる。

表2 *helping* (O) (to) *do*

資料	to不定詞	原形不定詞
HUTCHINSON	16 (94.1%)	1 (5.9%)
ECONOMIST	43 (86.0%)	7 (14.0%)
TELEGRAPH	36 (72.0%)	14 (28.0%)

先に示した表1で、現在分詞*helping*におけるtoの省略を率に直すと、*Telegraph*で省略率が最も高く22パーセント、これに*Economist*の8.5パーセントが続く。*Hutchinson*には原形不定詞の例は1例も認められない。この傾向は、同じ-ing型の動名詞の場合にも当てはまる。上の表2が示すように、ここでも原形不定詞をとる実例は少ない。ただし、*Telegraph*では14例（28%）と比較的高い数値を示しており、*Economist*でも7例（14%）見られる。*Hutchinson*ではわずか1例（5.9%）しか認められない。3つの資料ともto不定詞が圧倒的に多く用いられているが、一般の英語と比較すれば、ここでも特に新聞の英語で原形不定詞が比較的多く用いられる傾向が現れていると言えよう。以下、動名詞の実例を挙げる。

[Economist]

- (1) Instead of helping workers to move out of a depressed region why not encourage jobs to move in? (Oct 05)
- (2) The Americans and Germans have rewarded Albania by helping to modernise its armed forces. (Oct 26)

(3) Educational researchers are coming up with better methods for helping children learn. (Nov 23)

(4) They also claim that, far from helping conserve the bear, the farms are probably hastening its extinction. (Nov 09)

[Telegraph]

(1) Guerra at least had the consolation of helping Portugal to regain the team title. (Dec 16)

(2) Dr Murphy said the findings could one day prove useful in helping to guide treatment of anxiety disorders. (Nov 30)

(3) ...our two small children have insisted on helping me pack. (Nov 30)

(4) ...though they were shortly to be fired for helping run the company right off a cliff. (Dec 29)

C. 主語の種類と不定詞の形態

主語の種類、つまり、人主語か物主語かによって述語動詞helpの後に続く不定詞の形が影響を受けるのであろうか。先の表1で得られた*Hutchinson*, *Economist*および*Telegraph*の全実例547例から、主語が事物で、目的語をとる構文の実例を抽出し、資料別にto不定詞と原形不定詞で分類すると、その結果は次の表3になる。²⁾

表3 物主語と不定詞

資料	to不定詞	原形不定詞
HUTCHINSON	19 (1) (82.6%)	4 (0) (17.4%)
ECONOMIST	29 (4) (62.5%)	16 (1) (37.5%)
TELEGRAPH	14 (3) (32.3%)	25 (2) (67.7%)

* () 内はhelpが現在分詞の実例数。

%は現在分詞の数を差し引いて算出した割合。

表が示すように、*Hutchinson*ではto不定詞を用いる例が非常に多く見受けられる。*Economist*でも*Hutchinson*ほどではないが、to不定詞が優勢である。一方、*Telegraph*では、*Hutchinson*や*Economist*とは逆に原形不定詞が非常に多く用いられている。通常to不定詞をとることが多い現在分詞helpingの実例を差し引いても、すべての資料でこの傾向は変わらない。新聞の英語では、主語の種類に関係なく、toを落とす傾向が見られる。「物主語にはtoをつける」とする説は、一般の英語には当てはまるとしても、新聞の英語には当てはまらない。以下、*Economist*と*Telegraph*から、主語が事物で、原形不定詞をとっている実例を挙げる。

[Economist]

(1) ...computers can also help children learn to read and write faster. (Nov 23)

(2) This helps him make the great leap in the first place. (Oct 26)

(3) This is helping him build up a strong product base for 2005... (Dec 07)

(4) Those factors have helped them thrive in banking, in trade, and in the business of providing security. (Dec 21)

[Telegraph]

(1) ...as carrots help you retain oxygen in your blood. (Dec 28)

- (2) The programme will help you beat the 'blues' and cheer up for the New Year. (Dec 26)
- (3) And as digital data becomes ubiquitous, the copies you can give away become very good indeed. Clearly, the Internet helped people realise this. (Dec 31)
- (4) The victory helped Ghedina, 27, match Italy's downhill hero of the 1970s... (Dec 23)

D. 目的語の有無と不定詞の形態

動詞helpの後の直接目的語の有無が、その後の不定詞の形に影響を与えるのであろうか。先の表1で得られた3種類の資料の全実例547例から、helpの後に目的語をとらない実例を抽出し、資料別にto不定詞と原形不定詞を分類・集計すると、その結果は次の表4になる。

表4 目的語と不定詞

資料	to不定詞	原形不定詞
HUTCHINSON	70 (1) (65.7%)	36 (0) (34.3%)
ECONOMIST	76 (32) (42.3%)	61 (1) (57.7%)
TELEGRAPH	70 (26) (45.4%)	57 (4) (54.7%)

* () 内はhelpが現在分詞の実例数。

%は現在分詞の数を差し引いて算出した割合。

表が示すように、*Hutchinson*ではto不定詞をとる例が多く見受けられる。*Economist*と*Telegraph*では、to不定詞が多少優勢ではあるが、to不定詞と原形不定詞の実例数はかなり接近している。この数値から、通常to不定詞をとることが多い現在分詞helpingの実例を差し引くと、*Economist*と*Telegraph*の両資料で、原形不定詞がto不定詞を上回る。この数値からみる限り、新聞・雑誌の英語では、目的語をとらなくても、to不定詞と原形不定詞が同じように用いられていると見てよいであろう。「helpの後に直接目的語をとらない場合は、toをつける傾向がある」との指摘は、一般のイギリス英語にはある程度当てはまるにしても、新聞・雑誌の英語には当てはまらない。toのつかない例を挙げる。

[Economist]

- (1) More privatisation will help develop Europe's puny financial markets. (Nov 23)
- (2) The crisis helped drive the inflation rate above 60%. (Dec 14)
- (3) Work it seems helps determine other aspects of men's lives. (Sep 28)
- (4) In the 1930s, protectionism helped poison the world economy. (Dec 07)

[Telegraph]

- (1) Both sides agree that the race will help raise the profile of athletics in America. (Dec 30)
- (2) Blood test can help predict early birth. (Dec 23)
- (3) North Sea oil and gas output last month rose to the highest level for more than two years as colder weather helped boost demand. (Dec 30)
- (4) Strong black coffee will help cure a hangover. (Dec 29)

ところで、目的語の長さは、helpの後の不定詞の形に影響を与えるのであろうか。表1に示した実例合計547例から、目的語が3語以上から成る実例を抽出し、to不定詞と原形不定詞に分類してみた。その結果、*Hutchinson*では、該当する実例は合計6例見られ、そのすべてがto不定詞をとっている。*Economist*では、該当実例は6例（現在分詞helping2例を除く）であるが、その内5例がto不定詞、1例が

原形不定詞である。この1例は、目的語が4語から成る実例である。*Telegraph*では、6例の内4例がto不定詞、2例が原形不定詞である。この2例はいずれも目的語が3語から成る実例である。目的語が5語以上で原形不定詞をとる例はどの資料の実例にも見受けられない。新聞・雑誌の英語では、目的語が3語程度であれば原形不定詞をとることもあるが、それ以上長くなる場合には、toをつけることが多いようである。

E. to help (O) (to) do

help自体がto不定詞になることがある。各資料から、この構文をとる実例をそれぞれ50例まで順に検索し、to helpの後のtoの有無により、資料別に分類・集計すると、その結果は次の表5になる。

表5 to help (O) (to) do

資料	to不定詞	原形不定詞
HUTCHINSON	10 (20%)	40 (80%)
ECONOMIST	1 (2%)	49 (98%)
TELEGRAPH	6 (12%)	44 (88%)

この構文では、先に見た現在分詞や動名詞のhelping型とは逆に、*Hutchinson, Economist, Telegraph*のすべての資料で原形不定詞をとる実例が圧倒的に多く見られる。この調査結果は、「help自体がto不定詞になっている場合、その後ではto不定詞を避ける傾向がある」とするBurchfieldの指摘と一致している。ただし、3種類の資料で原形不定詞の数値を比較すると、*Economist*と*Telegraph*が*Hutchinson*を上回っている。それほど大きな差ではないが、ここでも、一般の英語よりは新聞・雑誌の英語でtoを落とす傾向が窺える。先に引用したように、約20年前の松田 (p.187) の<to help (O) (to) do>型の調査では、原形不定詞が43.2パーセントを占めていた。この数値を今回の調査結果と照らし合わせると、この構文では近年急速にto省略が進行しているものと考えられる。それぞれの実例を挙げる。

[Economist]

- (1) Mr Crutchfield has committed the bank to investing in any technology that can be expected to help customers to contact the bank without using a branch. (Oct 26)
- (2) Already some 15 online investment banks are vying to help firms use the new technology. (Nov 23)
- (3) Colombia wants all producers to cut exports to help boost world prices. (Dec 21)

[Telegraph]

- (1) The Parents Information Network (PIN) is an independent organisation that aims to help parents to cope with the bewildering world of computers. (Dec 24)
- (2) Now the two crime writers have joined forces to help to save the building. (Dec 29)
- (3) At school he had been nurtured by dedicated teachers whose only ambition was to help students get into Oxbridge. (Dec 29)
- (4) 'We all adore Christmas. I really look forward to it and the children are old enough now to help make the Christmas cake and pudding. (Dec 21)

4. おわりに

以上、英国の新聞および雑誌に見られる動詞helpの後に続く不定詞の形について、コンピュータを利用して得られた実例をもとに、一般のイギリス英語と比較しながら最近の傾向を述べた。フォーマルな一般のイギリス英語では、依然としてto不定詞を用いる傾向が強いが、同じフォーマルな英語でも新聞・雑誌の英語では、この数十年間にtoの省略が着実に進行している。このtoの省略傾向の原因の一つとして、新聞・雑誌の英語は、百科辞典のような一般の英語よりはるかにアメリカ英語の影響を受けやすいことを挙げることができよう。helpだけに限ったことではないが、アメリカ英語、特に新聞・雑誌のようなジャーナリズムの英語は、一般的に省略語法を好む傾向があり、このことがイギリスの新聞・雑誌の英語に影響を与えているように思われる。以下、今回の個々の調査結果を要約すれば次のようになろう。

- (1) <S help (O) (to) do>の構文では、一般の英語でto不定詞が用いられることが非常に多い。新聞・雑誌の英語では、to不定詞が多少優勢である。ただし、通例to不定詞をとることが多い現在分詞helpingの実例を除外すれば、新聞・雑誌の英語では、逆に原形不定詞がto不定詞を上回る。
- (2) <helping (O) (to) do>の構文では、一般の英語でも新聞・雑誌の英語でも、helpの後にto不定詞が用いられることが非常に多い。ただし、新聞・雑誌の英語では、一般の英語と比較して、原形不定詞の使用頻度が高い。
- (3) 物主語の場合、一般の英語ではto不定詞をとることが多く、雑誌の英語でもto不定詞が優勢ではあるが、新聞の英語では、逆に原形不定詞が多く用いられる。
- (4) helpの後に目的語をとらない場合、一般の英語ではto不定詞が比較的多く用いられるが、新聞・雑誌の英語では、to不定詞と原形不定詞の両方がほぼ同じように用いられる。通例to不定詞をとることが多い現在分詞helpingの実例を除外すれば、新聞・雑誌の英語では原形不定詞が優勢である。
- (5) <to help (O) (to) do>の構文では、一般の英語でも新聞・雑誌の英語でも、helpの後に原形不定詞が用いられることが非常に多い。新聞・雑誌の英語では一般の英語より更にその頻度が高い。

注

- 1) 本稿は、1999年10月3日に行われた日本時事英語学会第41回年次大会（武庫川女子大学）で口頭発表した内容をまとめたものである。
- 2) 国家、政府、団体などが、人間の集合体として機能し、意志を持つと考えられる場合は、人主語として分類した。

参考文献・資料

- Alexander, L. G. *Longman English Grammar*. Harlow, Essex: Addison Wesley Longman Limited, 1988.
- Burchfield, R. W. *The New Fowler's Modern English Usage*. Oxford: Oxford University Press, 1996.
- Chalker, Sylvia. *English Grammar Word by Word*. Harlow, Essex: Addison Wesley Longman Ltd., 1990.
- Eastwood, John. *Oxford Guide to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Greenbaum, Sidney and Janet Whitcut. *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex: Longman Group UK Limited, 1988.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. *A Communicative Grammar of English*². Harlow, Essex: Addison Wesley Longman Limited, 1994.
- Manser, Martin H. *Bloomsbury Good Word Guide*². London: Bloomsbury Publishing Ltd., 1990.
- Palmer, F. R. *English Verb*². Harlow, Essex: Longman Group UK Limited, 1987.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow, Essex: Longman Group UK Limited, 1985.
- , *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman, 1972.
- Swan, Michael. *Practical English Usage*². Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet. *A Practical English Grammar*¹. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Todd, Loteto. *The Cassell Dictionary of English Usage*. London: Cassell, 1997.
- Wood, Frederick T. *Current English Usage*. London: Macmillan Press Ltd., 1962.
- , *The Macmillan Dictionary of Current English Usage*, revised by R. H. Flavell and L. M. Flavell. London: Macmillan Reference Books, 1995.
- Collins COBUILD English Usage*. London: HarperCollins Publishers, 1992.
- The Concise Oxford Dictionary*^{5,6,9}. Oxford: Clarendon Press, 1964, 1976, 1995. [COD]
- Longman Dictionary of Contemporary English*^{1,2,3}. Harlow, Essex: Longman Group UK Limited, 1978, 1987, 1995. [LDCE]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*^{3,4,5}. Oxford: Oxford University Press, 1974, 1989, 1995. [OALD]
- 安藤貞夫・山田政美『研究社現代英米語用法事典』東京：研究社、1995.
- 小西友七（編）『英語基本動詞辞典』東京：研究社出版、1980.
- 松田裕『米語のインパクト』東京：大修館書店、1987.
- 『小学館プログレッシブ英和中辞典³』東京：小学館、1998.
- 『ジーニアス英和辞典²』東京：大修館書店、1994.
- The Daily and Sunday Telegraph on CD-ROM*. Cambridge: Chadwyck-Healey Ltd., 1996. [Telegraph]
- The Economist on CD-ROM*. Cambridge: Chadwyck-Healey Ltd., 1996. [Economist]
- The Hutchinson Multimedia Encyclopedia*. Oxford: Helicon, 1998. [Hutchinson]